

雑詠日記

可樂余韻

卷の二

二〇二五年

谷川
修



背戸の桜と高野つつじ 2025/3/31

・
・
・

砂浜に

打ち寄せる

波が

蟹の

つくる

わずかな

構造物を

消し去る

のに似て

ささやかな

雑詠で

日録を

記すことが

続いている

やがて失われるのに

一月一日 厨房に吾が影映す初日の出

元日に幼馴染の訃報あり人の定めに思念逸らすな

一月四日 同年の誰があと先？葬儀場

年越えて稲のひこばえ未熟の穂

一月九日 無名者が自家出版で老身の神経摩耗悲鳴を上げる (A Iと格闘)

一月十日 花を着て茶毘へと向かう人の末 (別の葬儀)

一月十四日 堂の代二七しろにしちの朝に水仙花 (夫を亡くした人が海岸端の草原で採取)

一月二十二日 窓の外赤い山茶花凝視して人という種のありよう思う

浮足立って年の初めを過ぎてきてやっと少し落ち着いて書を開いた、

大佛次郎の『バリ燃ゆ』。第一部「V・ユゴー」は、マルクスの『・・・ブリュメール10日』と同じルイ・ボナパルトのクー・デターを描く。伯父と甥の権力奪取のそれぞれの現場で起きた人間たちの蠢きを、大佛のペンが教えてくれる。ルイ・ボナパルトの極秘の帳面には「ルビコン」と書かれていたかとされているそうだ。カエサルと同じやり方の権力掌握が意識されていたと思われる。昨年末の隣国でのクー・デターはやはり大統領が企てたのだが、カエサルや二人のボナパルトほどの状況判断と決然とした行動がなくて失敗に終わった。東アジアでも成功したクー・デターは李世民のような果敢な人物によるものだった。一八六七年の日本の王政復古も小御所の会議の場で遂行されたが、倒幕派の軍隊が包囲していた。間が抜けていて出来事の推移をあとからしか知ることのできない者は、人間社会の政治の現場とそこでの人間の行動を、作家の描写から教わる。

今日では、ルイ・ボナパルトのようなうぬぼれで栄華を求める小人が、普通人が言うことをためらうほど乱暴な言葉づかいで煽って選挙に勝ち大統領になることが起きる。四年任期を延長するようなことがないようお願いしたい。没落を始めている大国のあがきを見ることになるが、せめて、残っている国力で世界中に引き起こす混乱が小さいことを願おう。

一月二十三日

ジョウビタキ覆い防草シート敷く

畑が雑草で覆われるのを嫌って常緑の琵琶の苗木を十本植えていたが鹿が来て葉を食い枯らしてしまった。同じく白髪の間じる老夫は、敗北を認めて、雑草を取り除くとき遺体を見つけた。一月の作務終了。体重減少。

一月二十七日

失望が老いた身の胆深く打つ

（生き延びる発見があると信じてしたこと）

一月二十八日

あと幾度小雪舞う中歩けるか

（寒風を避けて道草亭主岸壁の下で釣り）

気を長く短い時を享受せよ

一月二十九日

海囲む山はかすんで頬に雪

（頭巾の代わりに毛糸の帽子で寒中散歩）

二月三日

春立つ日春の兆しを待ち望む

以前話を聞いてもらった糸島市の考古学畑の人に『日本古代史像の転換』を寄贈したら、お礼のメールが来た（福岡市と太宰府市の学芸員から返信）

は来ない)。今は伊都国歴史博物館にいたそうだ。平原遺跡方形周溝墓が直視できないけれども高祖山系背後の飯盛山の方向を向いていることを、ぜひ理解してほしい。図を示しての理詰めの論証だから否定できないはずだが。博物館のあるところが伊都国だとする通念から脱出できるか。

二月五日

粉雪が内海囲む山並みを消して外へと視界広げる

老シテは舞いの終え方思案する

二月六日

鈍色の海に粉雪太陽が白い光の道を一筋

二月八日

老いの先雪中行脚して探る

二月十一日

ささやかに非力な者の一あがき命ひとが動くそこに生きがい

二月十五日

帰郷した燕迎える北の風

二月二十二日

退かず春に抗い梅に雪

大佛次郎著『バリ燃ゆ』を二か月近くかかってようやく読み終わった。
一つの生物種であることをまぬがれぬ人類の社会とその社会で生きる
個々の人間たちの思考と行動の限界が、つらく悲しいほど描かれている。
この物語は多くのことを教示する。それを考えてみなければいけない。

二月二十二日

寒さ押し行脚小雪が目に入る

（湾奥沢江の家々がわずかに雪化粧）

二月二十七日

吾が海は磯焼けワカメ未だ出ず

（泥に手を入れて今年も美を願う）

三月一日

鴨集い旅立ち準備する春日

衰えを自覚してなお果樹植える

（枯死する無花果の身代わりに）

三月八日

風ぐ海に水鳥が描く春の紋

呼びかけるバラ科の木々よ花開け

（桜桃・梅・杏・李・桃・梨・林檎……）

義姪の七回忌大無量寿経・白骨の御文章、納骨。命ある者の生死を思う。

身心の姿働き解き放ち不可思議な物と事との諸行に帰る

三月九日

鶯は白江庵の貴賓客

三月十六日

吾が木々は寒気に備えまだ蕾、園丁老いて持久力なし

(高野ツツジ)

三月十八日

果樹植える老夫は天に畏れ抱く

(寿命を考えない欲望)

夕食のあとNHKB放送の「世界ふれあい街歩き」を観たら、ドイツのエアハルトだった。約三十年前一泊したことを懐かしく想い出した。登場する人たちがそれぞれに人生を楽しんでいることが伝わる。今のわたしの生活の仕方にそういう悠々とした情趣が欠けていることを教えられる。

三月十九日

お代は角、檸檬の若木食った鹿

(まだ成果を出せない木に！角は半分)

野生の動物との角突き合わせぬ争いはまだ許せる。停戦協定を破って、イスラエルがガザ空爆、死者四〇四人。米国が許可したにちがいない。

三月二十一日

春風が帽子を飛ばし吉凶の運勢海に投げ入れる

三月二十二日

智慧育て詩句で『果樹園』造る人

二本ふたもとの紅白の薔薇花芽出すサアディー倣い花園はなぞの詠え

苦勞して書を読む者よこの世には心遊ばす園あるものを

人に無い根を土に張る木を植える夏に花咲け白い姫シヤラ

三月二十三日

詫び住まいする海蝶を訪ね来て黄蝶明るい声で挨拶

三月二十五日

一斉に桜の仲間花開くまた一年を見とどけようか

五月の陽気。残念なことに期待した杏は多くの花芽が未開に終わった。開花を待っているときの寒気が災いするらしい。五年も六年もそれに気づけなかった。夕食は、細君について来た孫娘と祖母で久しぶり焼鳥屋へ。杏の開いた花は三日もすると萎えた。やはり遅い寒気に弱いらしい。

三月二十九日

鉄骨の機能美見せる広い店モダンなランチ人の減る町

三月三十日

「サートンさんに教わる」

(May Sarton『終盤戦79歳の日記』読了)

人生で大切なのは

生活をよいものに

そして楽しむこと

できたら考え深く

盤上手が尽きても

芽を出だす山椒の木は二年生

三月尽

目をかける杏成果を挙げられず園丁もまた無名のせいか

(また寒気)

四月二日

岡のぼる海風鳶を空高く

大空へ見島を上げる霞む海

四月八日

イカ籠を下ろす漁船にイルカ寄る

(湾内に居ついたイルカ一頭)

四月十一日

しほんとよばれるものが、ぼうえき・きんゆう・さいせいなどいっさいをからめとつて、ちきゅうじょうをせんそうにまきこむ。にんげんは、ちりてきにわかれたぢめんのうえでせいかつをするようにつくられていて、それぞれのちいきにくにとよばれるしゅうだんをかたちづくり、まるでうまくはたらくことのできないせいふというものをつくるやりかたしかしない。しほんしゅぎのかみのとやらは、やはりまったくうまくはたらかないから、ひとびとはくるしんであくせくいきていくほかにない。そこに、おれがこのこんらんをかいけつしてやると、おおほらをふくものがあらわれて、せかいせんそうというだいたいをひきおこす。いまは、そのおとこがまるでよのなかのことをしんけんにかんがえていないことが、じかんをかけてあきらかにされるさいちゅうだ。

四月十四日

ただ清楚白い山吹咲く庵

四月十五日

露茜^{つゆあかね}当年二歳二季

(梅李交雑種二花受粉成就。四月中旬少霰)

四月十七日

花の背戸徒歩で鳥公が訪ね来る

四月二十一日

露茜二滴夢幻と化し消える

家の外壁北側の板壁に防腐剤を二日がかかりで塗り終わつた。残るは西側。

四月二十二日

太陽の恵みを受けて待ちかねた貴陽初めて青い実を生す

植えて十二年ぐらいたろうか。成らずの果樹への授粉が成功したらしい。

四月二十五日

朝陽射す白江居士の薔薇の園

背戸の通用口脇のデッキに立つと、手植えの小さな庭が見える。花木の雪柳・桜・高野ツツジ・白山吹・海棠などの花は終わり、今はオガタマが咲いている。花木の取り巻く内側の草花も、水仙・チューリップ・へと移り行き今は紫蘭など数種。それらの周囲には、左手北には黄と白のモッコウバラ、正面東には数百の白いヤマトバラ、右手高野槇の垣根の南側には背戸のアプローチとなる空き地があり、その南に紅白の西洋種のバラ。空き地の西、通用口右手の離れに沿ってコデマリ・車輪梅・ハナミズキが

四月二十六日

眼の前にトロツとした目青蛙

（季の実を探しているとき）

四月二十八日

鹿も来る国道のごみ黙々と拾う人あり望みある国

四月三十日

桜桃を孫へ届ける使者となる

（二度枯れた父母の植えた木が今年豊作）

山藤にまた会う幸のろうたげさ

田に水を入れて俵を山と積み

この山里俵山は昔からの湯治場で、共同浴場の名は白猿の湯。

咲き残っているが見えない。これが名もない隠士の薔薇園。こう言うと立派な園のように聞こえるけれども、背戸の空き地の東には内海ながら強い東風を防ぐための殺風景な物置小屋がある。サアディーほどの高雅な詩歌は生まれがたいのである。それでもこのデッキは、内海を挟んだ向こうの山の連なりから昇る月を眺めるよい観月台。ところが、今年の桜の時期の満月は雲に隠れて顔を拝めなかった。次回の十五夜が待ちどおしい。

五月三日

四十の果樹を布置する地図を描き皆実る時幻視して待つ

(大半幼木)

娘のところに來て数時間かけてカラーで作図。わたし用のパソコンを破棄。

五月八日

世話をする果樹それぞれの生を知る
人もまた日の恵み享け人の世話受け

五月十一日

芍薬の頂飾る十字の実

鯨回向イルカ一頭住まう浦

五月十二日

一輪の金色の花、花の月

(the flower moon)

五月十七日

姫林檎光る薨へ背伸びする

五月二十日

一本の棒の苗木が模索して枝を生み出し世の者となる

老妻の着付け練習介助する五日あとには京都の茶会

五月二十四日

京都へ

麦畑に光に代わり雨が降る

旅立ちを見守る像は山頭火

池に沿うもみじトンボの実で飾る

案内者離宮の貴重美と意匠聞かせて飽かず雨降る中で

五月二十五日

洛北に濃茶薄茶を喫す朝

大ホール表千家の同門会喜寿の和服の華やぎ満ちる
(参列者六四二人)

米高値古都の離宮で田植える

五月二十六日

新緑の天への橋にさしかかる

傘寿を超えて道はどこまで

六月六日

老痴愚が大きくじりに胆つぶす退場の時近づくと知る

六月九日

鶯が論す八十路の生きづらさ

旅行にでかけ大失策をしたり何やかやがあつて、身心消耗しているあいだに、草木は何事にも動ぜずまた一年を始めて繁茂している。少し離れた耕作放棄地に久しぶりに行ってみたら、防草シートを張った下から女竹が突き上げ、シートのない場所では勢いよく伸びていた。シートの下の子は踏んで折り、背を伸ばしたのは伐って根元に除草剤の原液を垂らした。これで勢力を弱められるだろうか。ほんとうは今日は隣の雑種地に茂りだした雑草に除草剤を撒くつもりだったが、あきらめてシルバー・センターに頼むことにした。老人の敗退である。負け戦は住居の庭でも。これまで中庭の剪定を九月に依頼していたが、それでは翌年のツツジの花が咲かないのでツツジだけは六月に自分でしていた。しかしこの状況である。こちらも庭師に頼むことにした。シルバー・センターの女性係員の冷淡な応対もあつて、今日はふたたび、老年の挫折感を味わう。

憔悴を癒す慈愛の時のなか臥して聴き入る血の巡る音

六月十日

梅雨入りの晴れ間の湾に大船の船首垂直しずつ進む

六月十一日

『歩くという哲学』を説く書物読み果樹園に来てこの生思う

六月十三日

頬に紅吾が白桃の待つデビュー

(園丁亦待)

六月十六日

床の間の脇の書院に三歳で死んだ次兄の写真を立てる
長兄は八日生きたと父母の言写真も無くてただ伝承に

(死後出生届)

六月十七日

小舟から声する海に夏至間近

六月十九日

軍用機鈍く鋭い爆音で閉塞の国空から威圧

(世界中で)

六月二十一日

法を無視米国軍機敵視する国を爆撃亡国の道

六月二十四日

海で強いカモメがトビを追ひ払う

六月二十九日

金印の島浮かぶ海、空梅雨の炎天に溶け六月尽きる

六月三十日

心労を時間にゆだね解きほぐすただ目を閉じて無為に端座す
連れ合いがほんに老いたと知らされる五時間かけて検査診断

ようやくに老いた夫婦が思い知る辛い暮らしが待ち構えると

七月四日

キジバトが七時を告げる、牛乳を買う朝の道猛暑を予告

今日も四時間かけて検査診断。現在の細君の痛みはリウマチ性多発筋痛症のせいだろうと分かった。抗ステロイド薬で緩解していくだろう。
両ひざと左肩の軟骨損傷はそのあと対応を考えることになった。

七月五日

松毬^{まつかさ}でハートマークを描くベンチ

七月六日

水求めミミズ地上で果て乾く

(春に植えた姫シャラの枝が枯れた)

七月九日

純白になつてはらりと散る蓮華

まだ白い手をした子蟹陽を避ける

七月十一日

笑み浮かべ木々と園丁慈雨を観る

五月来の混乱から抜け出ようとしている。買い換えたPCの整備も済んだ。中庭は庭師に任せるとして、海側の手植えの木々の剪定がまだ。

七月十三日

細君が蜂に刺されて休日の活気の消えた病院に行く

海側のモッコウバラを刈ろうとして。三、四度になるので念のため。『私は園丁のように働く』という題名のジュアン・ミロの短い文章を読んだ。象徴的な観念で語るモノローグはその人の絵よりもっと難解。

七月十六日

変調の国の機構はほころびて解体される商業施設

GDPという用語は資源の無駄使いを覆い隠す。

七月十七日

茂る森がうトンボは涼やかに

七月十八日

食堂が蓮の台の黄金虫
じきどう うてな

七月二十日

ガザ地域八割近く破却する一民族を捕囚する意図

攻撃前後二葉の写真がこの行為とホロコーストのどちらが残虐か問う。

七月三十一日

混沌の大暑にあえぐ老いた蝶

(世の浮動とこの気象になす術がない)

夏バテしガリレイ温度計玉沈む

七月二十五日

刈り終えた庭にヤンマが訪ね来る

(やっと手植えの木々の剪定終了)

七月二十六日

・・・・・・・・・・・・・・・・

米国大統領ハマス掃討を容認

楽しめよはかない花火数問うな

(昔は三千発、今宵は七十五)

七月三十一日

ヒト恨み乾いて果てる赤手蟹

八月一日

太陽に庭の松越し水を遣る

(白い袋に入った梨林檎が順に落^あえる)

八月二日

絡められ蜘蛛の餌食に蟬の熊

(真木の生垣。林檎と梨に遮光ネット)

八月五日

低い山越えて熱波の吹く浦の茶室の軸に清閑の文字

外国の人形たちがその文字に服している。群馬県で四一・八度記録。

八月七日

夜雨明けて秋立ち開く花芙蓉

(季節が遷った。書斎の花瓶に挿す)

八月九日

母の里訪ね互いの集落の衰微を嘆く為す術知らず

八月十一日

大雨の恵みブドウが色兆す

(遠くの地では洪水)

八月十四日

人の減る集落せめて盆踊り

(やがて去り逝く老人も)

物故者の氏名を書いた灯籠は海へ去りかね川にたゆたう

八月十六日

合ねむのき歛木に白鷺、盛夏まだ去らず

八月十九日

蟬の声つくる並木の日陰行く海の北には雲の峰々

昨日、わたしの提起する「太陽の道」に関心を抱いて映像作品にした
いという映像作家と会った。その人の構想を聞き、わたしも考えを述べ
て二時間半余。ほとんど読者を得られていない書物が、コンピュータを
用いる現代の映像処理や情報発信に長けた活動的な人の仕事によって、
読者を得られるかもしれない。老いた海の蝶にはかない夢を紡がせる。

八月二十日

水やりを終え目にとまる百日紅

昨夕帰宅し、今朝咲き初めたサルスベリに気づく。ローカル・ニュー
スが五月以来の気温が平年より二度以上高かったと教える。気候変動に
ふうふう言いながら暮らしている老人が、物言わぬ百日紅を見つめる。

八月二十一日

追いはぎは出ずヒゲラシが鳴く峠

八月二十四日

朝歌う虫も暑さに音を上げて夕べは黙し息整える

八月二十七日

林檎柿日焼けし葡萄青白く酷暑に喘ぎ水を求める

朝刊、果樹研究者が生産者の困惑と抜本的対応の必要を語っている。

八月三十日

姫シヤラにやる水すくう赤手蟹

録画していた一九五一年製作の映画『めし』を観た。監督は成瀬巳喜男、主演は上原健と原節子。わたしが六歳ころの社会が描かれている。今の社会や人々のふるまい方と比較すれば、何事もテンポが緩やかだったことが判る。描かれている敗戦後六年目の生活は平凡なものと考えられたのだろうが、都会のサラリーマンの暮らしはつましいものとはいえずでに安定していたのだ。そのころの粗末なつなぎのズボンは自分の写真を見れば、成長を始めた経済がいなかにはまだ届いていなかったことが判る。映画は、社会の規範が浸透していて、人々の多くがそれを基準に行動していたことを教える。今、世界中で、社会の規範はそれを学習する機会が減ったのかとても弛緩していて、現代資本主義が、急いで新しいことをするように促す。奨励されているのは、それぞれの

人間がなんでも自分の考えたままに行動することだ。情報過多の社会で変動する流行に乗せられて、適切なふるまい方をゆつくり考えることを怠って人々が行動している。現代の不安はそういうところから来る。

渡来人受け入れ減らす列島は人口減でどんな社会に？

誰もが渡来人の末裔である列島の人々はどうのような社会をつくるか。

八月三十一日

果樹園の下草五種の花を活け書斎で汗を拭い放心

九月三日

漸来秋気 病後五年 日過凡々 尚可楽余韻

九月六日

磯ツグミ秋の復活讃歌する

(秋はまだあった)

九月七日

一時間雷神が吠え鎮まる地

(白露未明、雨)

九月十日

茶の色の蟬螂老いる雨の下

九月十三日

放生の頃に草刈る老人は稲作民の習性を継ぐ

九月十四日

海へ遣る書齋で果てたネズミの子

九月十七日

彼の神はガザの殺戮許すのか

九月十九日

水やって命つないだナスを食う今のわたしに貴重なほうび

ツクツクボウシが鳴きカマキリがズボンにすがって遅い秋が来たのを
喜ぶ。わたしの秋はとつくに終わって、乏しい実りを待っている。

九月二十日

敵国で爆発させるミサイルと原潜持てと言う、有識者、

製造する国営の工廠も。また、日銀が長いあいだ投資信託を（銀行券
を余計に発行して）買って溜まったのを百年かけて売ると言うニュース
も。この国には大した有識者がいる。「有識者」という言葉の無化。

九月二十二日

ムベなるか見つけた庭師よい目もつ

九月二十五日

蚊柱が剪定終えた庭に立つ

踊る蚊よモミジは未だ色づかず

九月三十日

秋氣好し寝惚け額で柱撃つ

(長い瘤)

競い立つ、冷氣に感応秋桜

(若い果樹よりも背高く)

十月四日

衰える国に舵取り底をつく

天下を決する秋に久しく。権力と名利を求める者は多いが、危険な政治という海で経験を積んで能力もある舵取りは少ない。衰微する社会には、志をもつてそれぞれの道に進み努力を重ねる機会が閉ざされるのだから、今は多方面ですぐれた人材が払底している。それが衰退。

十月五日

一夜明けカラスの衆が鳴きたてて人の惰眠に警告をする

露草の露に濡れつつ蔦も抜き栗を拾って暮らしを立てる

杜甫は、死の二年前満五十六歳の詩「泊岳陽城下」で意氣盛ん。

留滞、才尽き難く 艱危、氣益々増す

十月九日

身を勞し寝椅子に老いを横たえて内から手当て元氣養う

あおぎた
青北風に蜘蛛網を張り鞆蹴す

十月十一日

童心で育てたアケビの幸を食う

ガザ停戦、長続きしてほしい。

十月十三日

栗拾い栗落ちる音聞く日和

陽が染める橋脚の美に石榴和す

十月十一日

夕陽照東山 海亦水色佳 事事有所感 晩歳何時断

十六日

岩波文庫の鈴木虎雄訳注『杜詩』第八冊読了。

四川を去り家族を連れて船で漂泊していた最晩年の詩を載せる。拙なる生き方をする人がそれを貫く姿と、なお湧き出る詩想が高遠であろうとすることに感嘆する。この文庫本は、鈴木訳注の『杜少陵詩集』のうちおよそ半分の五百余詩を収め、「語釈」を口語体に改め新かなづかいにしたもの。鈴木訳注が文字通り畢生の労大作であることを、監修者小

川環樹の言葉に教えられた。全八冊を読み通したいところだが、解説を載せた最終冊を読んだ。

十月十七日

聡明な孤高の舗師が訪ね来て蝶の志操を試問して去る

海風に揺れる桔梗が季を白く

(夜、西洋を旅する夢)

十月二十日

安芸宮島へ一泊旅行、行ったことのない妻のため。同行妻娘義妹。

書を置いて心を秋に解き放て

宮島の磐座海と島々を見通し伸ばす太陽の道

十月二十一日

潮寄せる社殿に光ゆらめいて時のリズムに身が浸される

豪壮な大経堂は今神社廃仏毀釈思想葬る

(戦歿将兵慰霊の千疊閣)

十月二十二日

この国を没落の道へ誘い込む思想粗雑な権力亡者

寒氣来て皆花開く布袋草

(危機を感じて朝遅く朱を帯び)

十月二十三日

朝刊の紙面一変不平等軍備拡張批判は見えず

十月二十五日

首里城の復元作業職人ににじみ出ている自尊の品位

(NHKの番組)

収穫の祭りに替えて柿吊るす

十月二十八日

痩せバツタ行き暮れ妻の肩すがる

玉ねぎを植えて歳寄る春を待つ

(寿命に寄るという意味か)

十月三十一日

遠く来て表座敷に百足^い入る

(冷えて霧雨の降る日)

十一月一日

露しげく降りる山里美しく小柿がたわわ褒める人待つ

十一月四日

澄む水が緩やかに行く秋の砂州白鷺三羽閑やかに立つ

十一月六日

遠くから予期せぬ朋が訪ね来て秋の佳き日と内海褒める

(八女から)

十一月十一日

破顔して鱒釣り上げ海光る

(知り人)

帆を上げた小舟活気のもどる海

十一月十二日

大船が静々と来て菊花咲く 天地閑せず人事の卑小

(東山を見る)

十一月十三日

友人が重い病氣と告げるのに言葉を吞んで受話器を握る

十一月十四日

廃屋が壊されているこの国の疲弊まざまざ海が見ている

(四軒目)

十一月二十二日

鹿が来て幼いポンカンの枝を折る 一歩一歩と自然は冬へ

十一月二十七日

露おいて霧湧く田畑川に鴨煩い忘れ無心に憩う

十一月二十八日

秩序なく脳裏を巡るアイディアがすすきの原の奔馬のごとく

十二月二日

生命を挿し木のザクロ根づかせて二年を生きて葉を黄に染める

十二月三日

一畳の芝生を退治柿の下 寒気が作業よく楽にする

ともに語るべからざる者が玄関に。孔子の言葉をかみしめる。

十二月七日

押し切りで小餅をつくる寺の堂重ねた餅が美しく立つ

昔は地下と呼ばれていた集落の報恩講という古い慣習は、大きく転換した現代社会でいつまで続くか。作業の詳細の背後にある文化は？

十二月九日

一年の仕事小餅と林檎得て終わる

十二月十三日

遠方の朋から電話「デコポンと海藻が来た」、佳い年来たれ

十二月十五日

湾奥は風がやわらか釣り師言う

(朝冷えたけれど)

昼食後

海を行くイルカと競い陸走る

(岸壁から 20 m あまりを北上)

タベ

湾奥に白鳥が二羽生き残る老夫と共になお生きていけ

(以前は八羽)

十二月十九日

海の上晴れ渡る空悠々と二羽の青鷺弧を描いて舞う

作業終え柿を頬張る熊のこと

十二月二十二日

虹の弧を描いて祝う冬至の陽

冬至の陽本貫の地の隠士射る

十二月二十三日

吾が生気果樹に託して冬至越す甦る日に海馬御す蝶

施肥の作業のあと、背戸の野良生えの雑木の枝を高切りばさみで伐つた。予想外の力仕事だった。来年も同じような作業ができるだろうか。

十二月二十六日

小雪舞い老シテも舞う立命し

十二月二十七日

冬空を高く飛ぶ鳶に手を打って地に在る者が挨拶送る

十二月三十日

久しぶりランチ会食親族が歳を重ねて赤子加わる

十二月三十一日

余念なし大晦日おおつこもりの一沙鷗

赤銅ひわだの檜皮新たな瑠璃光寺

植物に生命という神秘観て天地の間に夢紡ぐ者

ルイズ・ミツシエル
社会改革の闘士の少女時代の詩

二〇二六年 正月
白江庵 謹製



夕風よ お前はつましい雛菊をどうするの
海よ お前は浪をどうするの
空よ 輝かしい雲をどうするの
おお 夢はとても大きく魂はとても小さいのだ
黒い宿命よ
お前は私の巨きな夢をどうしてくれるの
光よ お前は物言わぬ影をどうするの
そして あんなに遠くから蝶を
自分のところに呼び寄せるお前よ
おお 焔よ お前は夜の蝶をどうするの
不思議な夢？よ お前は私をどうするの

『バリ燃ゆ』初刊本、最後の行の「夢」の次の文字が印字できていない。

